

「木おぼこ・今晃」に寄せる。

桑原金作

こけしの世界で、一番発祥の遅く生まれた津軽系統の工人・今晃さんのこけしに魅了された著者坂入良喜氏の心境に感動を覚え、この拙文を書く羽目になった。

津軽・大鰐系のこけしは、津軽系統の中にあって、幼稚、野生、呪術、泥臭さ等々と評価され、伝統こけし界でも一番人気の低いこけしである。津軽には、師匠が描彩したこけしを伝承して製作するという不文律が受け継がれており、それは現在も脈々として生きている。こけしを別な角度から眺めた場合、「伝承の保守と進化の遅れ」が津軽には幸いしていると言える。低迷しているこけし界にあって、近年、津軽こけしが少しずつ見直され、明るい光を投じられている。きれいさに依存しない津軽独特な風俗を表現し、呪術、野生といった他系統にはない味が理解されるのであれば、誠に喜ばしいことである。

今晃は原のこけしをそのまま写すのではなく、良いところだけを取り入れた上で、「自分はこの様に表現したい!」、「構図はこの様にする!」という気持でこけしを作る。すると原こけしとは別な味が生まれてくる。特に表情領域は、今晃自身の独特な感性で表現され、一般的な伝統こけし概念から見たら「異常」と思われかも知れない。

こけし界が現在にあって、時代が要求するこけし美とは何か。伝統こけしにおいても、創作する中に表現される感性の所産である美について、時代が何を求めようとしているのかを感じなければならない。特に津軽系こけしにおいて、それを知るには津軽の風俗、風土に根ざした文化と人柄や人々の親交等々、所謂「お国柄」を広く知る必要がある。長く厳しい冬の雪国に耐える強さ、待ちし春は山野に芽吹きやリンゴの受粉をする喜びを、短き夏は「ねぷた」の熱き勢い、そして、年内に山詣りをして正月を迎えるという人情に厚い、酒の国柄です。津軽こけしは、一般的なきれいで可愛いこけしを描かなかったため、不評を被った時期が長く、特定の工人以外は問題にされないような、人気の低い系統である。今晃のこけしとても、芽が出るまで、たいへんに苦労したものと思われる。時代とともに伝統こけしの世界でも徐々に個性が求められるような面も出てきた。今晃のこけしは、昭和52年2月頃、長谷川辰雄弟子時代の小寸物が「木の花」などに見られるように注目されていった。鳴子修業後、昭和57年1月以降にこけし制作を開始すると、人気が出て、その個性的な表現が少しずつ認めら